

幼児の情動調整スキルの測定 —養育者評定による尺度の信頼性・妥当性の検討—

鈴木亜由美 (広島修道大学)

キーワード：情動調整, 幼児, 養育者評定

問題と目的

養育者評定による子どもの情動調整の尺度として, Emotion Regulation Checklist (ERC) (Shields & Cicchetti, 1997) が広く用いられているが, この尺度は調整スキル自体ではなく調整の結果を測っているのではないかという指摘もある。そこでそこで Mirabile (2008) は情動調整プロセスモデル (Gross, 2002) にもとづき, 悲しみ, 怒りなどの特定の情動生起場面を想定して, 12 種類の調整方略の使用頻度を測定する尺度を作成した。本研究では日本の幼児を対象に, この 2 つの尺度の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

方 法

調査対象者

調査会社 (株式会社クロス・マーケティング) に登録しているリサーチモニターの中から, 幼稚園・保育園等の年少, 年中, 年長にあたる子をもつ各 100 名計 300 名を対象とした (子: 女兒 141 名, 男児 159 名, 平均月齢 50.8, 62.7, 74.6 ヶ月, 養育者: 女性 138 名, 男 162 名, 平均 39.5 歳)。

調査項目

1. Emotion Regulation Checklist (Shields & Cicchetti, 1997) 24 項目を和訳したもの
2. Emotion Regulation Skills Questionnaire (Mirabile, 2008) から, 「怒り」と「悲しみ」の計 26 項目を和訳したもの
3. 自己制御機能尺度 (大内・長尾・櫻井, 2008) の自己主張, 自己抑制, 注意の移行, 注意の焦点化, 計 22 項目。
4. 問題行動尺度 (高橋・岡田・星野・安梅, 2008) から内在化問題, 外在化問題, 自閉傾向計 18 項目。

結 果

すべての尺度について性差は見られなかったため, 以後の分析は性別をこみにして行った。

1. Emotion Regulation Checklist 24 項目について, 最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況と解釈可能性から 3 因子構造を採択して Promax 回転を行い, 因子負荷量の十分でない, または複数の因子に負荷している 5 項目を削除した。因子 1 を「ネガティブ表出」($\alpha=.83$),

因子 2 を「コンピテンス」($\alpha=.79$), 因子 3 を「衝動性」($\alpha=.74$) と命名し, 各因子の平均得点を算出し, 年齢差を検討するために 1 要因分散分析を行った (Table 1)。

2. Emotion Regulation Skills Questionnaire Mirabile (2008) の分類による適応 ($\alpha=.74$, 80), 不適応方略 ($\alpha=.70$, 71) に対する平均得点をそれぞれ算出し, 年齢差を検討するために 1 要因分散分析を行った (Table 1)。

Table 1 各尺度の平均得点と SD, 分散分析の結果

		年少	年中	年長	F 値	多重比較
ERC	ネガティブ	1.68 (0.61)	1.59 (0.55)	1.54 (0.42)	1.76	
	コンピテンス	2.60 (0.44)	2.78 (0.51)	2.84 (0.51)	6.65	年少 < 年中, 年長
	衝動	2.15 (0.64)	1.91 (0.58)	1.95 (0.61)	4.48	年少 > 年中
	適応	2.59 (0.53)	2.51 (0.64)	2.60 (0.52)	0.72	
	不適応	2.51 (0.61)	2.40 (0.70)	2.40 (0.49)	1.08	
	ERSQ					

3. 尺度間の関連 妥当性検証のために, ERC と ERSQ の各下位尺度と自己制御機能尺度, 問題行動尺度の各下位尺度間の月齢を統制した偏相関係数を求めた。

Table 2 尺度間の偏相関係数 (月齢を統制)

		自己制御機能尺度			問題行動尺度		
		主張	抑制	注意	内在	外在	自閉
ERC	ネガティブ	-.24**	-.31**	-.09	.23**	.34**	.33**
	コンピテンス	.57**	.48**	.34**	-.35**	-.23**	-.29**
	衝動	-.15*	-.39**	-.38**	.20**	.45**	.23**
ERSQ	適応	.12*	.03	-.01	.12*	.16	.13*
	不適応	-.12*	-.27**	-.21**	.28**	.33**	.27**

** $p<.01$, * $p<.05$

考 察

ERC は α 係数も比較的高く, 年齢上昇に伴う変化や社会性発達に関する既存の尺度との関連が見られ, 一定の信頼性・妥当性が示された。一方, ERSQ では年齢変化が見られず, 「適応的」とされる調整方略の使用頻度が問題行動と正の相関を示すなど, 項目内容の再検討を必要とする結果となった。